



# 月刊 部品新聞

2013年7月 第78号

編集・発行 Unit

## 競技者の心中

「シークレットレース」という文庫本を薦められ、読んでみました。

まだお読みでない方スポーツ関係者の方は是非一読をお勧めいたします。

あらすじ

ツールドフランスなど様々な自転車ロードレースで活躍してきた、ハミルトンタイラーが身の回りに起こっていた、ドーピングに関する告白の回顧録になっています。

そしてそのほとんどがツールドフランスで7連勝（後に剥奪）のランスアームストロングとの関わりについて書かれています。もちろんその中にはタイラーだけではなく、ランスのドーピングのドーピングに関する事も含まれています。ちょうど今年はツールドフランス開催百年という

こともあり、テレビで見ている方も多かつたかもしれません。

今でこそドーピングは無いと公言されていますが、この本を読んでもうと、果たして本当にそうかと疑問も生じ、素直に見ることのできなくなってしまう。

勝つために

自転車の歴史はドーピングの歴史とも言われています。

特にヨーロッパではロードはメジャーなスポーツとして認知され、プロとして生活も十分にできます。プロとなるとやはり勝利をするということが、スポンサーに対する一つの成果としてとらえられます。

周りがドーピングをして能力を上げていくのに、自分だけそれを利用せず、勝利ができない状態は、スポンサーか

ら見れば成果を上げられていないというように見られても仕方がありません。

周りと同様に生きるためにドーピングを行っていたとタイラーも述べています。

この考え方は、スポンサーから勝利を望まれているプロとしては、至極まっとうな考え方のように聞こえます。

しかしドーピングはいつれ発覚します。そうなたとときに本人はもちろん、スポンサーの社会的な地位、その競技自体の世間的な評価も失墜させ

てしまいます。その様に考えるのとそれは決して正しい考え方ではなく、あるグループ内だけで存在する勝利至上主義が生み出した、歪んだ考え方です。

競技者として

勝つことがそれまでの全てを肯定してしまう勝利至上主義に傾くことは、一般的な感覚からずれた感覚になる場合が多いように思えます。勝利のためにすべきことを行う。それが競技者としての本来の姿勢

で、勝利できるかどうかはまた別の話です。

他人事ではない

タイラーは、秘密を隠すため、親に対してまでも嘘をつき続けなければならぬ、深い後悔と反省をしなければなりません。

これを必要悪と切り捨てるのではなく、各競技団体は、各競技団体のスポーツ界全体でドーピングに対して厳しい姿勢を取ることが求められるのではないかと考えます。

## シークレットレース

原著：Tyler Hamilton  
Daniel Coyle

翻訳：児島 修  
出版社：小学館

Unit 代表 澤野 博 (さわの ひろし)

日本体育大学卒。社会人経験を経て欧州へ留学。乳酸を中心としてトレーニングを幅広く学ぶ。帰国後、部品となって競技者を支えるという意味で「Unit」を設立。競技種目、競技レベルを問わずトレーニング指導を中心に活動。医療系国家資格の臨床検査技師の資格を持つ異色のフィジカルコーチ。NSCA CSCS、JADA DCO なども保有。  
ご意見、ご要望、仕事依頼、お問い合わせは下記まで。  
0422-34-5055 (Fax 兼用)、090-1999-2845 または sawano@team-unit.com